

活動の概要（2011－2012 年度）

秋葉 裕一

当研究課題は翻訳プロジェクトと略称されることが多い。連携拠点の2年目に発足した。2013年度を最終年度として、もっか研究計画を進めているところである。当プロジェクトは、日本国外で刊行された舞台芸術関連文献を翻訳し、ウェブ上で無償公開することを目的としている。これまでの研究成果を年度ごとにまとめてみる。

2010年度は、19世紀末から20世紀初頭にかけて、主としてヨーロッパで刊行された未邦訳の重要文献を中心に、ドイツ語・フランス語・ロシア語・英語の四つの言語で翻訳を進めた。それぞれの言語文化圏については、谷川道子（東京外国語大学）・藤井慎太郎（早稲田大学）・鴻英良（演劇評論家）・内野儀（東京大学）の4氏の協力を得た。4氏による翻訳文献の解題も付けられた。

2011年度は、前年度は抄訳に留まったヨーロッパ世紀末転換期演劇論の全訳を行った。さらに、平林宣和氏（早稲田大学）と里見実氏（國學院大学）の協力を得て、中国・ラテンアメリカを加えることができた。名のみ高い重要文献に日本語でアクセスできるメリットは、知の共有という点からおおいに注目され、2011年12月の日本演劇学会・秋の研究集会の共催シンポジウムでも話題を呼んだ。

2012年度は前年度に引き続き、中国・ラテンアメリカの現代演劇の翻訳を継続し、東南アジアの翻訳が加わった。この地域の責任編集者は松井憲太郎氏（キラリ☆ふじみ館長）である。世紀末転換期の文献をアップし終えたヨーロッパ組は、すでに2011年7月に「1938年問題研究会」を立ち上げ、2012年12月まで6回の公開研究会を開催した。「1938年問題研究会」のめざすところは、この時期の前後に起こった社会・政治・文化面での変動を領域横断的な眼差しで捉え直すことである。ヨーロッパ組の主力メンバーが交互に講師を務めて議論を深めたのち、歴史家や文学研究者を講師として招聘した。より大きな枠組みから演劇研究を考察すべく、もっか最終年度のテキスト確定作業に入っている。公開研究会の講師は塩川伸明（東京大学）、小沢弘明（千葉大学）、田之倉稔（演劇評論家）、池田浩士（京都精華大学）といった方々である。いずれの研究会においても、若い研究者の参加を得て、議論が深められ、新たな問題提起がなされている。

こうした公開研究会などでなされるがごとく、舞台芸術の基礎的文献が演劇に関心を抱く人々によって共有され、言語横断的に議論され検討されることが、まさに当プロジェクトの願うところである。けれども、グローバルな展開というには、なお欠落している時代や地域がはるかに広がっていることが、これまでの議論のなかで明らかになってきた。アップされた翻訳をより完全なものに仕上げる一方で、演劇の知の断絶をどのように埋めていくかが、これからの課題といえよう。